

高等学校国語科「言語文化」の授業提案

―百人一首の解釈を深める―

* 植村 彩未
** 元田 篤志

〈序論〉

1. テーマ

2023年度前期に、古典文学演習で百人一首の解釈を深めるというテーマの授業を受けた。ここでは一つの作品の解釈を深める方法、古典文学の研究の方法について学習した。今回の発表でも授業と同様の方法で百人一首の解釈を深めていきたい。

あわせて国語教育的観点から、高等学校学習指導要領（平成三十年告示）における「解釈を深める」活動として、百人一首の解釈を深めることによって何を学び、どのような力を身につけることができるのか考察を行うために、国語領域専攻の学生を対象としてアンケート調査を行った。今回はその結果を踏まえて授業提案をしたい。

2. 先行研究概観

高等学校の和歌を扱った授業に関する先行研究を概観する。高等学校で和歌を扱った授業に関する論文は数多く存在する。その中の一部を紹介したい。

まずは、和歌の特徴を生かした系統性のある学習について述べている三根直美氏の論を見ていきたい。三根氏は「大切なのは、この教材では何をメインとして和歌を指導していくのかという目的意識を授業者が持つことであろう。高校三年間で、和歌文学の重要なことが網羅できるよう、高校一年から授業者が確認していくことが必要になる。」と指摘している。そのため授業案として、本稿でも扱う「大江山」の授業案があげられている。ここでは、「相手が逃げ去るほどの威力を持った和歌の技量を確認していくことで、入門

期といえども、その面白さは伝わるであろう。」と論じている。この「和歌の技量を確認」というところから、和歌の修辭に注目して和歌の面白さが感じられる「読むこと」の授業であることがわかる。

次に、百人一首を通して和歌を読み味わう力を育てる授業実践として、伊藤靖幸氏の論を見ていきたい。伊藤氏は「和歌の修辭、詞書を通して和歌が詠まれたコンテクストを含めて心情を理解すること、和歌の文化性の理解」の三点を学習内容として取り上げている。この実践は知識・技能として修辭や詞書を踏まえて読むことを提示しているが、その先の解釈を深める、和歌を味わうということまで求めているため、やはり「読むこと」に注力した実践であると言えるだろう。

最後に、百人一首を英訳する授業実践について、田中育代氏の論を見ていく。田中氏はピーター・J・マクミラン氏の『英語で読む百人一首』を教材として扱っている。田中氏は「英訳を教材とし、原典と比較すること、百人一首の詠歌過程だけでなく、優れた翻訳過程の追体験が可能」としている。比べ読みを通して、作品の解釈や理解を深めることができるということ

は、数多の論文で指摘されていることである。田中氏も英訳と比較することで、和歌の解釈を深めようとする「読むこと」に注目した授業提案をしている。しかし、これだけではなく、田中氏は「訳詩創作を取り入れることで、学習者に、解釈や表現に当事者として向き合うことを促すことができる。」とも述べている。生徒が自ら百人一首を英訳する活動、すなわち「書くこと」に注目した活動を取り入れている点が非常に興味深い。

3. 対象作品

本稿では、百人一首六〇番の次の和歌を教材に取り上げて考察を進めていく。

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の
橋立 小式部内侍

〈本論〉

1. 教科書分析

この章では平成三十年告示の学習指導要領に対応した「言語文化」の教科書のいくつかを分析し、「大江山」の和歌の有無、出典の作品、採用されている本文の範囲を見ていく。また、教科書の分析結果から、今回の発表のテーマである、「大江山」の和歌を使って解釈を深める授業提案の妥当性についても言及したい。

まずは「大江山」の和歌の有無についてだ。一例をあげると、東京書籍、明治書院、桐原書店、筑摩書房の四社の教科書に採用されていることが確認できた。いずれも『十訓抄』を出典としている。

次に、教科書に採用されている本文の範囲についてだ。収録されているすべての教科書で、「和泉式部、保昌が妻にて」から始まっている。終わりにについては、東京書籍と桐原書店が「おぼえいできにけり。」まで、明治書院と筑摩書房が「しられざりけるにや。」までとなっている。また、表記については、筑摩書房はひらがなが多く、明治書院はふりがなも歴史的仮名遣い

になっている。明治書院は「まだふみもみず」の「みず」を漢字で「見ず」としている。

最後に、今回の発表において「大江山」の和歌を使うことの妥当性についてだ。「大江山」の和歌は多くの言語文化の教科書に採用されている。また、出典が『十訓抄』か『古今著聞集』かの違いこそあれ、古典探究の教科書にも採用されている。具体的には大修館書店、数研出版、第一学習社があげられる。したがって、言語文化だけではなく、古典探究の教科書にも採用されていることから、「大江山」の和歌を使って授業提案をすることは有意義であると言えよう。

2. 「大江山」の本文（十訓抄）

『十訓抄』上「第三 人倫を侮らざる事」三ノ一 和泉式部、保昌が妻にて、丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌よみにとられて、詠みけるを、定頼中納言たはぶれて、小式部内侍ありけるに、「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなくおぼすらむ」とい

ひて、局の前を過ぎられけるを、御簾よりなからばかり出でて、わづかに直衣の袖をひかへて、

大江山いくのの道の遠ければ

まだふみも見ず天の橋立

とよみかけけり。思はずに、あさましくて、「こはいかに。かかるやうやはある」とばかりいひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより歌よみの世におぼえいできにけり。

これはうちまかせての理運のことなれども、かの卿の心には、これほどの歌、ただいま、よみ出だすべし、とは知られざりけるにや。

3. 十訓抄をベースとした和歌の解釈

まずは語釈を確認しよう。

- ・「大江山」：丹波国と丹後国の境にある山。
- ・「いくの」：「生野」と「行く」をかけた掛詞。
- ・「生野」は現在の福知山市の地名。
- ・「ふみ」：「文」と「踏み」をかけた掛詞。

・「天の橋立」：丹後国の歌枕。現在の京都府宮津市にある。日本三景の一つ。

次に、十訓抄の本文の確認をする。十訓抄では、小式部内侍の母である和泉式部が、夫である藤原保昌とともに丹後国に下ったところから話が始まる。和泉式部は平安中期の歌人で有名である。和泉式部が丹後国に下っているときに、小式部内侍は歌合に参加することになった。その小式部内侍に藤原定頼は「母のいる丹後国に送った使者は帰ってきましたか。さぞかしご心配のことでしょう。」と冷やかした。つまり、有名歌人である和泉式部のもとに使者を送り、歌合で披露する和歌を作ってもらいましたか、その和歌は届きましたか、ということ定頼は言おうとしているのである。それに対して、小式部内侍が即興で読んだ歌が、「大江山」の和歌である。

これらの語釈と『十訓抄』の本文を踏まえて、「大江山」の和歌の解釈をする。

大江山を越えて行く、生野の道は遠いので、私はまだ天橋立を踏んではいませんし、丹後国にい

る母からの文（手紙）もまだ見ていません。

4. 比べ読み（金葉和歌集との比較）

ここからは、教科書に採用されている『十訓抄』の「大江山」の和歌と金葉和歌集の「大江山」を読み比べ、和歌の解釈を深めていきたい。

大江山いくのの道の遠ければまだふみも見ず天の
橋立（十訓抄）

大江山いくのの道の遠ければふみもまだみず天の
橋立（金葉和歌集）

ここで注目したいのは異同の問題である。『十訓抄』の「大江山」は「まだふみも見ず」という語順になっているのに対して、『金葉和歌集』の「大江山」は「ふみもまだみず」という語順になっている。このことから、解釈においてどのような違いが生まれるのであるうか。

これについて論じたものの一つに、安道百合子氏の

論がある。まずはそれを見ていきたい。安道氏は「和歌だけを一首として読むと、「橋」がある以上「踏み」の意味は自然に理解されるが、「文」の連想はむしろ難しいのではなからうか。」と述べている。さらに、「ふみもまだみず」の場合は「手紙もまだ見ておりません」の意味が強調されるとして、「まだふみもみず」の場合は「手紙の意味が二次的なものに後退」して、「踏み」の意味が強調されるとしている。

たしかに、天橋立がある以上、和歌単体で見ると「踏み」を強く意識するのは自然のことだろう。しかし、『十訓抄』や『古今著聞集』の本文を読んでから解釈すると、「まだふみも見ず」は「文を見る」と「踏みみる」の両方の意味が掛かっている掛詞として解釈してしかるべきである。逆に、「ふみもまだみず」とあれば、「ふみ」と「みず」が分断されているので、「踏みみる」ほうでは解釈しにくいように感じる。その分、「文をまだ見ていない」という解釈になる方が自然で、手紙の意味である「文」を前面に押し出して強調しているのではないだろうか。

5. 比べ読み（『英語で読む百人一首』） 日本語と英語の違いに気づく

ここでは、『十訓抄』の「大江山」の歌と、先行研究で紹介した田中氏が教材化されていたマクミラン氏の『英語で読む百人一首』にある「大江山」の歌を比較していきたい。

大江山いくのの道の遠ければまだふみも見ず天の
橋立（十訓抄）

No letter's come from my mother,
nor have I sought help with poem,
crossing Mount Oe,
taking the Ikuno Road to her home
beyond the Bridge to Heaven.

英訳された「大江山」を日本語に直訳すると、「私の母からの手紙は来ていません。また、大江山を越えて、天橋立の向こう側にある母の家へ生野の道を通して

て行き、詩の助けを求めたことはありません。」というようになる。和歌と比べるとかなり説明的である。和歌の場合は、それ自体だけを見れば、「まだふみも見ず」ということしか書かれていない。解釈した結果、「まだふみも見ず」が掛詞であり、「母からの手紙をまだ見ていない」とことと「まだ天橋立を踏んでいない」ことがわかるのが和歌である。一方、英訳の方は初めから掛詞の説明が明記されてしまっていて、解釈の余地が残されていない。英語と日本語の言語的な差異と言ってしまう話は簡単だが、どうも英訳すると味気ないように感じてしまう。

しかし、英訳することの意義ももちろんある。田中氏の指摘にあるように、英訳するためには和歌自体の解釈を深めておく必要がある。その点で、和歌を英訳することには大変意味があると思う。

6. 比べ読みのアンケートを踏まえた授業提案

ここからは、先ほど解釈したことと、国語領域の学生に行ったアンケートをもとに、比べ読みの授業が果

たして可能なのか考察し、授業提案とする。

まずは、高等学校の学習指導要領（平成三十年告示）をもとに、生徒につけさせたい力を明確にしておく。今回の活動では、「思考力・判断力・表現力等」の「B読むこと」（1）の「エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること」の力を育てることを目標とする。

また、今回の比べ読みの活動は、右の「B読むこと」の言語活動例の「エ 和歌や俳句などを読み、書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり、テーマを立ててまとめたりする活動」に該当する活動だと認識している。では実際に、国語領域の学生に行ったアンケートの結果を踏まえて、授業提案をしたい。

アンケートでは二つの質問をした。一つ目は「まだふみも見ず」と「ふみもまだ見ず」の異同について、読み比べて感じたことや印象、解釈など気付いたことを自由に述べてください」というもの。二つ目は「古典の『大江山』の歌と英訳された『大江山』を読み比べ、感じたことや印象、解釈など気付いたことを自由に述

べてください」というものである。アンケート結果の一覧は別の資料にまとめたので、ここでは解答の一部を見ていくこととする。

まずは一つ目の回答を見ていこう。

一人目は、「まだふみも見ず」は掛詞が上手くはたらいて、手紙を読んでいないことと天橋立まで行っていないことの両方の解釈ができる。「ふみもまだ見ず」だと、天橋立とのつながりが薄く感じ、手紙を読んでいないというイメージしかできない。」という回答をしている。

二人目は「まだふみも見ず」はふみ以外の他の物もまだ見ていなそうだが、「ふみもまだ見ず」は、ふみだけまだ見ていないという感じがする」と回答している。

三人目は、「違いがわからない」と回答している。

この三人の回答は非常に面白い。一人目は掛詞に関する言及があり、和歌の知識が深く、その知識をもとに自分なりに解釈している。二人目は掛詞に言及していないという点で、和歌の知識がそこまで深くはないのかもしれない。しかし、自分なりにしっかり考えている回答に見える。一人目と二人目は、言葉の些細な

語順の違いから、解釈の違いに気づくことができている。つまり、自分なりに解釈を深める思考力を身につけられていると言えよう。

それに対して、三人目は違いに気づくことができていない。なぜ気付くことができないのかと、要因を探ろうとすれば様々な要因が考えられるが、本質はそこではない。これについては後程言及したい。

次に、二つ目の回答を見ていこう。

一人目は「元が古典だからかもしれないが、やはり古典の方が掛詞による意味の捉え方が面白い。英訳はどうしても順番に説明するしかないから、面白みがなくなってしまうと思う。」と回答している。

二人目は「古典には書かれていない歌の対象が書かれている。具体的には母と明記されていて、英語の方は訳すだけでこの歌の意味と背景がすぐにわかった。」と回答している。

三人目は「わからない」と回答している。

この三人も非常に面白い。一人目は和歌の知識もあり、英訳との違いをもとにした解釈についても言及している回答である。二人目は和歌に関する言及は少な

いが、英訳の方にはしっかりと言及があり、英訳の方をベースとして解釈を深めている。つまり、こちらも自分なりに解釈を深める思考力を身につけられていると言えよう。

三人目は一つ目の質問と同様、わからないというものであった。

これらのアンケート結果から分かるのは、国語領域の学生でさえ、ここまで探究的な活動で回答の質に差が出てしまうということだ。先行研究で田中氏が百人一首を英訳する活動をされていたが、クラスの全員が教師の求めるレベルの活動ができたとは到底思えない。そのため、まずは異同の問題や英訳されたものと比べ読みをするという、既に取り組まれていて、比較的やりやすい（と思われる）方法でアンケートを行った。それでも、一つ目に質問にも、二つ目の質問にも、「わからない」という回答がある。しかも、これは別々の人が回答しているので、一人の特殊な例ということではない。つまり、どの集団であっても「わからない」と回答する生徒がいることを、想定する必要がある、ということを示す結果であると言えよう。

では、どのようにすれば探究的な学習がうまくいくのであろうか。それは、学習者が基礎的な知識・技能を確実に有している状態で活動することであろう。例えばそれぞれの一人目の回答を見てほしい。異同の問題に関しては「掛詞が上手くはたらいて」と回答し、英訳の方でも「古典の方が掛詞による意味の捉え方」と回答しているように、和歌の修辭法である掛詞の知識がある。このように、知識・技能がしっかりと定着している生徒が探究的な活動をした場合、思考力・判断力・表現力を効果的に育てることが出来るのである。逆に、知識・技能の習得が確実ではない生徒が探究的な学習を行ったとしても、期待した効果を得ることは難しいだろう。探究的な学習を行う前に、生徒が確実に知識・技能を習得できる授業を行う方が、たとえそれによって探究の時間が減ろうとも、結果的に生徒の力になるのではないか。

〈まとめ〉

本稿では、まず「大江山」の和歌の解釈をした。そ

の際に、異同の問題を踏まえた比べ読みと、英訳された「大江山」との比べ読みを行った。そのうえで、これらを高等学校で行うことが果たして可能なのだろうかと思ひ、国語領域の学生を対象にアンケートを取った。その結果、比べ読みでは、「言葉の些細な語順の違いから、解釈の違いに気づく」「和歌と英訳の違いから、解釈の違いに気づく」ことによって、「自分なりに和歌の解釈を深める」力を身につけることができることがわかった。しかし、「わからない」という回答もあり、知識を持ち合わせているほど、深く探究することができないのではないか、という結果に至った。

高大連携による探究学習の研究をしている石川敬之氏は「探求学習においても探求するテーマについての文献をよく読み、その知識を得ることは極めて重要である」と論じているように、やはり、探究をするためにも知識・技能は必要不可欠である。石川氏はさらに、「高校生に適切な探究学習のテーマを設定させ、「正しい」探究の方法や手続きを教え、さらに主体的・自主的な学びの要素までを取り込むのは至難の業」と論じている。確かに、全てを一度に行うことは難しいが、

知識・技能として、「正しい」探究の方法を教え、その方法を使って生徒が考えることができれば、探究的な学習が成立するということである。

探究的な学習が重視される今だからこそ、知識・技能の確実な取得が必要であり、それが可能な授業をしていかなければならないのではないだろうか。

〈発表の振り返り〉

令和五年十一月二三日に開催された国文学会では、たくさんのご指摘やご質問をいただきました。この場を借りて、感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

そのなかで、京都教育大学附属高等学校（以下、附属高校）で、本発表でも論じた「和歌を英訳する活動」に関する実践が行われているというご指摘をいただいた。この実践に関して、附属高校の佐古先生が探究のプロセスに注目して論じている。

プロジェクト（課題）を自分たちで発見・設定し、

その解決方法をA L（アクティブ・ラーニング）による〈協働〉で探究する教科・科目横断型授業を行った。具体的には、国語（古典）で学習した和歌の中から、グループで一つ選んで、それを英語の詩に直し、さらにまたそれを和訳して新たな和歌にするという作業を通して、元の和歌との差異を楽しむという授業である（岡本ほか、2019）。互いのプロジェクトの成果を鑑賞し、批評しあうプロセスを経ることで、自分たちの意図と聞き手の評価との間の差を検証し、「自分たちの探究の進め方は正しいものだったのか／妥当なものだったのか」を内省する契機を与えることができた。〈目的設定〉↓〈実践〉↓〈方法論の妥当性の検証〉という過程の中で、自分たちの課題解決方法そのものを検証するメタ認知の次元を経験した。つまり、他者評価を通して自己評価へ戻るという過程で、自己をモニターし、学習成果を自己評価することで、学習過程を常に自覚しながら主体的な関わりを持つとする「自己調整学習」を身につけていったと言えるだろう（ジマーマン、

シャンク、2014）。この他者評価という〈視点の複数性〉の経験が、CT（クリティカル・シンキング）を鍛えることになっていると考えられる。

私たちは、和歌を英訳するという探究的な活動を通して、思考力・判断力・表現力などを育むことを目標としていた。しかし、附属高校の例では、主体的に学習に取り組む態度を育むことが出来ると、佐古先生は指摘している。授業者が何を目標とするかで、同じような活動でも学習の結果が変わってくるのであろう。

最後になりますが、私たちには思いつかなかった、探究のやり方について指摘していただけたこと、本当にありがたく思います。教員として、生徒の成長のために自身の学びも深められるよう、一層の努力に励んでいきます。

（*横浜市立戸塚高等学校校定時制）

（*岡山県立岡山一宮高等学校）

〈参考文献〉

- ・浅見和彦 校注訳『新編 日本古典文学全集51十訓抄』（小学館 1997年）
- ・石川敬之「高大連携を通じた探求学習の課題と可能性」（北九州市立大学地域創生学会『地域創生学研究』号6 2023年）
- ・伊藤靖幸「和歌を読む力」を育成する授業の実践「百人一首」を題材として」（『言文』福島大学国語教育文化学会 66巻 2019年）
- ・川村晃生 柏木由夫 工藤重矩 安道百合子「まだふみもみず」考——小式部内侍「大江山」歌説話教材の要点——（梅光学院大学日本文学会『日本文学研究』47巻 2012年）
- ・佐古孝義「生徒の批判的思考を向上させる授業づくりを目指して」（『KEJのジャーナル』関西英語教育学会 8巻 2023年）
- ・田中育代「英訳百人一首で育むことばの力——比較や英語による訳詩検索を通じて、解釈や表現の豊かさに触れる和歌学習——」（『言語表現研究』兵庫教育大学言語表現学会 38巻 2022年）
- ・谷知子「百人一首（全）」（KADOKAWA 2010年）
- ・ビーター・J・マクミラン「英語で読む百人一首」（『文春文庫 2017年』）
- ・三根直美「和歌の特質を考慮した系統的なアプローチの一試案」（『広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要』第63号 2016年）
- ・安道百合子「まだふみもみず」考——小式部内侍「大江山」歌説話教材の要点——（梅光学院大学日本文学会『日本文学研究』47巻 2012年）
- ・「金葉和歌集」（川村晃生 柏木由夫 工藤重矩『新日本古典文学大系 9 金葉和歌集 詞花和歌集』岩波書店 1989年）